ともに育つ
こどもたちの
エピソード集
＝ part2 ＝

認め合い、支え合い、ともに暮らすまち

東松山の推進

～ すべての人が主人公になるまちを目指して ～

東松山市地域自立支援協議会

障害のある子どもの育ちと学びを支える連絡会議

発刊に寄せて

東松山市障害のある子どもの育ちと学びを支える連絡会議

会長　　水上　克己

障害のあるなしにかかわらず全ての子どもには、同じ社会で生きる人間として共に学び、育ちあっていく三間（時間・空間・仲間）が必要です。

今、新型コロナウィルス禍の中にあって、私たちは三密を避ける生活を余儀なくされています。人と人とが距離を置き、自由に関わり合えない、マスクでお互いの表情も分かりにくい、そんな社会状況が子ども達の育ちを歪めてしまわないか懸念されます。

しかし、色々と困難な課題がある中においても、私たち教育・福祉・保健関係者は、全ての子ども達の育ち合いの環境づくりに心を砕き、未来への希望を抱いて実践に励んでいます。

この度、皆様のご理解とご協力を得て「ともに育つこどもたちのエピソード集part２」が出せることは誠に喜ばしいことです。

多くの皆様にお読みいただき、「育ち合い」のあり方について共に考え、学び合えれば幸です。

目 次

●「ともに育ち合う」……4

東松認定こども園げんき 細川あやな先生

●「ゆなちゃんのお話」……11

たかさか保育園 下川陽子先生

●「障害があってもなくても」……16

保護者　上加都美さん

※　このエピソード集は、

「令和元年「ともに育ちあう」を考える研修会の実践報告をまとめたものです。

令和元年度「ともに育ちあう」を考える研修会

日　時　　令和元年11月16日（土）13時30分から

内　容　　第1部　映画上映　みんなの学校

第2部　実践発表　わたしたちの町の

「みんなの学校・幼稚園・保育園」

主　催　　東松山市地域自立支援協議会

障害のある子どもの育ちと学びを支える連絡会議

「ともに育ち合う」

東松認定こども園げんき　細川あやな先生

はじめに

東松幼稚園は満３歳児から５歳児まで各学年が１クラスずつの幼稚園です。私は今、３１人の５歳児クラスを２人担当で行っていて、その中に支援を必要とするお子さんは４人います。幼稚園では、支援を必要とする子どもたちに対して、保育者同士、共通理解を図り、保育を行っていますが、子どもたち同士の生活の中では、支援だったり障害やハンディがあるという意識を持たずに、困っているところがあれば助けたり、泣いていると声をかけたりと、自然な関わりを持てるような保育を進めています。普段の「何気ない日常」の中で、友だちと、いいことも、お互いにいたずらしたり、やんちゃしたりすることも、それぞれが刺激し合うことでの成長や、気持ちが変化する場面に私自身もたくさん出会います。今日は、ほっこりするような、友だち同士で育っていると感じた事例をいくつかお話させて頂きます。

こうくんのこと

こうくんは、かけっこが早く、体操も得意で、運動することが好きな男の子です。気持ちのままに行動をしたり、みんなが何をしようとしているのかわかっているけれど、嫌な時には、なかなか保育室に入れないこともあり、情緒面での支援を必要とするお子さんです。

年長に進級した当初も幼稚園のままごとのリュックに、人形やままごとのおもちゃをつめこんでいつも持ち歩いたり、高いところが好きで、お気に入りのところで過ごすことがありました。友だちと遊ぶことも時にはありますが、持続しないですぐに抜けてしまったり、折り紙に興味を持った時には、一緒に折ってくれる保育者を探し、その保育者と過ごすことが多い様子もありました。

宿泊保育での出来事

７月に年長児みんなで、３泊４日の宿泊保育にでかけたときのことです。家族と離れて、クラスの友だちと保育者と過ごす４日間、戸外で８人のグループで行うゲームの取り組みがありました。そのゲームは、６枚のマットを使って跳び越えていく飛び石ゲームや、遊歩道を歩きながら、順番に缶をけりゴールを目指す缶けりゲーム等、グループみんなで協力してすすめるものでした。

何をするのか具体的に想像がつかず、「いかない！」「や

らない！」、何度も誘いをかけても「いかない！」の一点張りで、一緒にやらたがらないこうくんでした。仕方なく、こうくんのグループはこうくんを残してスタートすることになりました。しかしスタートしたものの、グループの子どもたちは「ぼくが蹴る」「わたしが」と、まとまることもなく、気持ちもバラバラで、なかなか前に進めない様子がありました。

一方、園長先生と待っていたこうくんは、「やらない」という気持ちを伝えるために、グループの保育者に電話をかけることにしました。電話をかけてみると、電話の向こうでは、「やっぱりこうくんがいないと！」「こうくんがいないと負けちゃうよ」と、グループの子どもたちや保育者の声が聞こえたようで、それを聞いてスクッ立ち上がり「いく」とこうくん。気持ちに変化が見られたのです。友達が自分を必要としていることを素直に感じることができ、友達から頼りにされたことが嬉しかったようで、走ってみんなのところに行きました。こうくんが仲間に入ると、グループのみんなは仕切り直しをして、「よし！がんばるぞ！」と気持ちが同じ方向に向き始めました。こうくんが合流してからは「こうくんは次蹴るんだよ」「次はわたし！」「次は〇〇ちゃん」というみんなの声が聞こえ始め、気持ちが１つになった様子が私にも伝わってきました。

この宿泊保育をきっかけに、こうくんは友だちと一緒にやる楽しさや、友だちと過ごす楽しさを感じることができたようでした。

楽器遊びのこと

こうくんが、友だちの良さを感じ、周りの子がこうくんを認めるできごとが、２学期になってもありました。木琴やタンバリン、鈴、カスタネットなどの楽器で子どもたちの楽器遊びが始まり、「次はカエルの歌」、「パプリカね」と、楽器を交代しながら遊ぶ子どもたち。その音を聞いて興味を持ったようで、こうくんが部屋に入ってきて「こうくんあれやる！」…。何をするのかな、と見ていると、椅子を準備し木琴のバチを一本だけ持って立つと、みんながこうくんの方を向き、こうくんは指揮者になるようでした。

指揮者になった瞬間、目をつぶってピアノの音に合わせてノリノリで指揮をするこうくんの姿を見て、周りの子どもたちが「こうくんいいね！」「おもしろい！」と演奏会が始まりました。これをきっかけにクラスの中でもこうくんを認める声も増えてきたように感じます。「友だちと一緒に」の遊びや活動が楽しくなってきたこうくんは、お気に入りの特定のおもちゃやリュックを持ってることも少なくなり、「一緒に遊ぼう！」と友だちを誘ったり、誘われたり…と、友だちと遊ぶと楽しいと感じているようでした。

たっくんのお話

たっくんは、自分の体を支える力が弱く、姿勢を保つのが苦手で、活動中に突っ伏したり、寄りかかることがある男の子です。友だちと一緒が好きですが、欲しいものや、やりたいことがあると、我慢をすることや、譲ることが出来ずに、友だちとの距離感が難しいところがあります。思い通りにならないことがあると、近くにいる、関係のない子にも言葉より先に手が出てしまったり、泣いてしまうこともあります。

チョコレート屋さんごっこ

朝遊んでいた時、土山で土をカップにいれてチョコレートを作っているひーくんをみて、そのカップが欲しくなったたっくんは、カップを取ろうとしました。ひーくんも支援の必要とするお子さんの一人です。この二人のやりとりは日常的なことなのですが、ひーくんはたっくんにすぐに気づき、「だめ！」たっくんは思いが通らずひっくり返り大号泣でした。「同じようなカップを探しに行く？」と保育者も誘いましたが、なかなか切り替えができずにいました。たっくんが泣いていると、「どうしたの？たっくん」同じクラスのゆうちゃんが心配そうに覗き込み、「あっちでチョコレート屋さんやってるよ」と声をかけてくれました。ゆうちゃんは、たっくんが泣いているといつも気にして声をかける女の子です。

ゆうちゃんが砂場でチョコレート屋さんごっこをしている友だちのところまで連れて行くと、たっくんは泣きやみ、すっかり気持ちがチョコレート屋さんごっこに向いたようでした。「チョコレート下さい！」と嬉しそうに言うたっくん、「いらっしゃいませ。どーぞ！」と周りの友だちもチョコレートを作ってくれました。チョコレートをもらうと「おいしそう」「ありがとう」「上手だね」たっくんは嬉しそうな表情でチョコレート屋さんをしている友だちのことをたくさん褒めて、褒められた周りの友だちもちょっぴり照れくさそうでしたが嬉しそうな表情でした。たっくんが褒めると「じゃあアイスもつけちゃうよ」なんて言いながらチョコレート屋さんも大盛り上がりでやり取りを楽しんでいました。思いが伝わらないこともあったり、涙が出たり、手が出てしまうこともあります。物が欲しくて勝手にとってしまったり、どうしても言葉が足りなくて手が先に出てしまうこともまだまだあります。

そういった時に「ほしかったんだよね」と、言葉をつけ加えられるゆうちゃんみたいな子もいれば、納得がいかず喧嘩になることもあります。こういった関わりの中で、少しずつ「やりすぎちゃったな」「ごめんね」という気持ちに気づいたり、優しくしてもらって「ありがとう」という気持ちが出てきたりしています。たっくんは手が出てしまうこともあるのですが、誰かが泣いていると、ティッシュを持ってきて涙を拭いてくれます。きっと、いつもそうしてもらってい

るからです。友だちに優しくしてもらった経験が、今度は自分がしてあげようという気持ちになり、優しさや思いやりの気持ちが育っていると感じています。周りの子も、こうくんやたっくんと関わることで成長できる場面もたくさんあります。

友だちとの関わり合いは子どもの成長にとって大きな意味があると思いますし、日常の中で私も、たくさん学ばせてもらっています。これからも、子どもたちのほっこりエピソードや日常の中で育っていく姿を見つけて、私自身も保育者として成長していきたいと思います。

「ゆなちゃんのお話」

たかさか保育園　下川陽子先生

ゆなちゃんは、気になるものがあると部屋から出ていったり、お話もほとんどなく、大人からの言葉かけも理解するのが難しい状況でした。私は２歳時で入園してきたゆなちゃんと、あまり関わることなく２年が経ち、年中から担当になった時は、呼んでも振り向かず、年少で先生と一緒にできていたこともできなくなってしまいました。きっと、今までほとんど話したことのない私を「話なんか聞くものか～」と試していたのだと思います。私は、こうなってほしい、ああなって欲しいという強い気持ちで関わるというよりも、日常の中でできるところは見守って、時には背中を押して、みんなと一緒にできることが少しずつ増えていくといいなあという思いで日々を過ごしていました。このような毎日を重ねていくうちにだんだんと笑顔を見せてくれたり、私の話にも耳を傾けてくれるようになりました。

ある日の出来事

お友達と一緒に遊ぶよりも、絵本を見たりパズルをしたりと、自分の世界に入って好きな遊びを楽しんでいたゆなちゃんですが、その日はなんだかお友達が楽しそうに笑いながら絵本を読みあっているのが気になったようで、お友だちの輪

の中に入って自分の好きな絵本を持ってそっと座り、読み始めました。お友だちが気になり自分から入っていく姿を初めて見たのと、お友達も自然とゆなちゃんを受け入れている姿が微笑ましかったです。今まで気にならなかったお友達のことが気になり始めたのだな、と思いました。ゆなちゃんは普段、戸外では走り回ったり遊具にのぼって遊ぶことが多かったのですが、ボールが目に入ると一人で投げたりキックをして遊んでいました。ある日のこと、その姿を見ていてお友達がゆなちゃんと遊びたくなったようで、「ゆなちゃんいくよ」と、ボールを投げると、嬉しそうに投げ返していました。

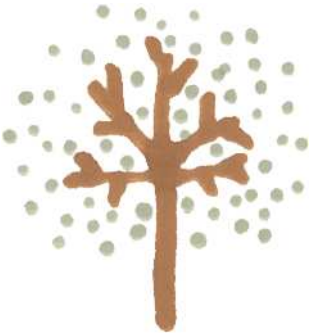
その後もう一度投げましたが、ゆなちゃんはその１回がとても楽しく満足だったようで、違う遊びに行ってしまいました。ボールを投げたお友達は「え、もう終わり～」と言っていましたが、「また今度やろ～」と言いながら違う所へ遊びに行っていました。何気ない日常の一瞬の場面でしたが、誰かと何かを一緒にやりたいという思いや、興味が無いようにみえていたゆなちゃんが、自分から関わっていたわけではありませんが、お友達が関わってきたことに対して、関わり返したという一場面は、私の記憶に残りました。

運動会「ドンドンドン！」

年長さんの運動会では、「ドンドンドン」という太鼓の音に合わせて遊戯の入場をしました。その入場の太鼓をみんなの代表として、ゆなちゃんに叩いてもらうことにしました。

本当は、ゆなちゃんはみんなと一緒に遊戯をやりきるのは難しいかもしれないと考えていました。そんな時に、大人がサポートのしやすい太鼓の方がゆなちゃんの活躍の場があると考え、太鼓に誘ってみたところ、とっても楽しそうに参加してくれました。初めは手を添えて一緒に叩いていましたが、何回か一緒に練習するうちに一人でも上手に叩けるようになり、最初のポーズになるために太鼓を鳴らすのも、いつのまにか入場から並び終えたタイミングを自分で判断し、「ドドン」と鳴らせるようになりました。いい意味で、期待を裏切るような活躍をしてくれました。こうやって心配していた遊戯も踊りきってくれました。

みんなと一緒にやりたいという気持ちが育っていたと嬉しく思いました。年中の時にはできなかったことができるようになり、一年間の成長はすごい！と感じました。大人はゆなちゃんの出来栄えにびっくりしたのですが、クラスのお友達はゆなちゃんの太鼓にあわせて普通に入場し、遊戯を踊り、いつものように過ごしていました。クラスの仲間だと思っているからこそ、騒ぎたてもせず、当たり前に受けとめていたのかなあ、と思いました。



アンパンマン図鑑

ある日のことです。大好きなアンパンマンの図鑑を見て楽しんでいたゆなちゃん、大好きな気持ちを伝えたいのか、お友達にアンパンマンの図鑑を見せて「か

して～」と一瞬クラスも静かになるほど大きな声で、お友達に迫っていきました。その「かして～」の声にお友達もちょっとびっくりしている様でしたが、「『あなたの好きなキャラクターを指さして』って言っているのかもね」と伝えると、「あっそうか」と言って、「これだよ」と、お友達は指さしていました。キャラクターを指してくれると嬉しそうに次のお友達のところへ行ってまた「かして～」と言っている姿がとてもかわいかったです。その後お友達も、ゆなちゃんの見ている絵本を一緒に見ようとしたり、パズルをやっているゆなちゃんの横で、お友達も絵本を一緒に見ようとしたり、パズルをやっているゆなちゃんにお友達も混ざって遊んでいることが多くなったように思いました。

ゆなちゃんも、以前はお友達が混じってしまうと怒っていました。今は、お友達と何かをする楽しさを感じ、一緒にやりたいという気持ちが強くなってきたのかなと思いました。

「おしょう先生！」

最近の話ですが、お昼寝に行くのにみんなが先に行ってしまい、私と２人になった時に、私の背中をトントンとたたきながら「おしょう（ようこ）先生！！」と呼ばれました。自分の気持ち、やりたいことを伝えようとする時は「先生」と呼び、手を引っ張るようなことをしますが、話しかけるように「おしょう先生！」と呼ぶことは初めてだったので、嬉しかったです。自然と「なーに」と優しく返事をしたくなるような、心と気持ちが一体となっ

ている心地よい呼びかけでした。本当に些細なことですが、普段と違う呼びかけだったので、私の心に残り、今でも思い出して嬉しく思います。

大人の私が考えるよりもずっと子どもたちの心の中は柔軟で、クラスのお友達同士として育ち合っていると感じています。これからも子ども達を手助けしながら日々をすごし、卒園を迎えられればと思います。

「障害があってもなくても」

保護者　上 加都美さん

はじめに

娘・ひまりは、３つ上の兄と４つ下の妹の三人兄妹の真ん中です。出生した翌日に腸捻転になり手術。先生には生きて戻ってこられないかもしれないと言われましたが、どうにか生還しました。その後、敗血症のため、交換輸血を２回行いました。２か月ほどで退院はしましたが、発達はとてもゆっくりでした。６か月頃からてんかん発作の様なものが見られ、現在も治療中です。１歳の頃にハロークリニックで脳性まひの診断を受けました。現在１７歳ですが、１人では座位をとることも厳しく、食事も一人で取れず全介助です。また言葉は簡単な単語「パパ、ママ、ハイ、バイバイ」等１０種類ほど言える程度の重度の心身障害児です。

保育園時代

保育園に通うきっかけとなったのは、１歳の頃から母子で通っていた「ハローキッズ」が閉園することになったことで、思い切ってわかまつ保育園の一時預かりを週１回利用することにしました。そんな中、私が下の子を妊娠・入院することになり、預け先として同じような障害を持つ子ども達の中の方が良いのでは？という意見もありましたが、わかまつ

保育園の年少さんに入園することにしました。母が送迎できない時はケア・サポートいわはなが協力してくれて、ありがたかったです。保育園では、とにかく子どもたちと一緒に過ごしていたようです。運動会では、介助の先生がものすごい速さでひまりのバギーを押してくれて、子どもたちと演技していました。また、クリスマス会では一人で立つことのできないひまりを、支柱付きの補助具を履かせて立たせてみんなと一緒の衣装を着て踊っていました。どんな行事でも親としてはとてもドキドキする部分ではあったのですが、この２つには大笑いしてしまいました。

ひまりは音にとても敏感な子です。特にピアノの音は、時には泣き出してしまうくらい大嫌いでした。でも、保育園や学校ではピアノは絶対ある物なので、私からは、てんかん発作にならない程度にピアノの音が鳴っても他の部屋へ移動しないでほしいとお願いしていました。先生方もひまりの様子を見ながら対応してくれたお陰で、今では家の中でいきなりピアノの音がしても嫌がらずに過ごせています。先生から聞いたお話なのですが、ひまりの周りのお友達がよく「アンパンマン」と言っていたのをまねしたのか、ひまりなりの「アンパンマン」と言っていたらしく、先生が「ひまちゃんはアンパンマンが言えるんですねぇ」と教えてくれました。近くでお友達の言葉を聞いていく中で、ひまりなりの発語が増えていくのが感じられてとても嬉しかったのを憶えています。

小学校時代

小学校への入学は特別支援学校と迷ったのですが、やはり兄妹と同じ学校へ通わせたいと思う気持ちが強く、新宿小学校へ入学しました。入学前より、特別支援学級の先生方と交流させて頂き、学校へ遊びに行かせてもらえる機会がありました。わかまつ保育園からも６～７人一緒に入学することもあり、子ども達もひまりに声を掛けてくれてとても心強かったのを憶えています。また新宿小では特別支援学級に肢体不自由クラスがあり、６年生・３年生に車いすを利用している先輩達がいました。ひまりに対しても１人の介助員さんがついてくれて、担任の先生と交流先の先生とはとてもよく情報交換をしている様子でした。また、幼少期からかかわってくれていた理学療法士や作業療法士さんが来訪してくれて、ひまりのウォーカーやプロンボードや、作業活動の取り組みについても、担任の先生と情報交換をしてくれていました。

１年生の時は１学年のクラスが同じ階にあったので、国語・音楽・体育・給食を交流先のお友達と一緒に過ごしました。２年生からは２階以上になってしまったため少し交流が減ってしまいました。古い学校だったのでエレベーターもなく、先生方が階段で一生懸命運んでくれていましたが、高学年には体もだいぶ大きくなり交流も難しくなっていきました。エレベーターをつけてくれるようお願いはしていましたが、なかなかハード面の改善は難しい様でした。３、４年生の頃、ひまりのてんかん発作が増えた時に

は、先生や介助員さんから学校の様子をよく教えて頂き、落ち込み気味の私に「一緒にがんばりましょう！！」と声を掛けてもらいました。この時は、「ひまりの子育てを一緒にやってくれている」と感じて、嬉しく、また心強く思いました。

朝の登校はひまりと私で通学班で通っていました。そこで毎朝見守り隊のおじさんが「おはよー今日も元気だね！」とか「今日はちょっと眠そうだね」と笑顔で声を掛けてくれました。他の場所でもおばあちゃんが必ずひまりの前に来て、顔を近づけていろいろな声掛けをしてくれました。その間、通学班の子ども達は立ち止まって待っていてくれました。

通学班のお友達とは色々な思い出があります。ひまりの兄がいる時代は、お兄さん・お姉さん達が「おはよう」という言葉を、ひまりの言いやすい言葉を探して毎日・毎日声を掛けてくれていました。朝の７時３０分という早い時間からの活動ではありましたが、よく耳をすませて聞きながら、笑顔を見せていました。

中学校時代

中学への入学は、小学校入学の時よりも、とても悩みました。小学校時代に一緒に過ごしたお友達と一緒に地元の中学校へ入学するか、それとも、ひまりのからだの成長に、もっと専門的で必要な活動をしてくれそうな特別支援学校へ進むべきか…。小学校６年生の運動会で組体

操をやった時、ひまりもみんなと参加しました。私は心の中で「ひまりに組体操？なにが出来るだろうか？」と思っていました。先生に見やすい場所を教えてもらい見ていたところ、子ども達がピラミッドを作り、その向こう側にひまりが待機していて、ピラミッドが崩れたらひまりが現れる…。という仕掛けになっていました。とても感動しました。その他ウェーブもみんなの中に入り、手をつないで演技していました。このみんなでやった組体操を見て、ひまりもみんなと一緒の中学校へ行かせたい！と思い始めました。

そんな中、後押しする様なできごとがありました。東中学校在籍中の兄から、中学校の特別支援学級の先生に「ひまりちゃん東中で待っているよ。」と声をかけられたと教えてくれました。その後もその先生が新宿小学校まで足を運んでくださり「ひまり東中においで。」と猛アピールしてくださった様です。その話を聞いてなんとなく道が決まった気がします。

東中学校に入学して、当初特別支援学級は３０人くらいの子ども達がいてとても賑やかでした。先生方も小学校の先生方とは違い、時にはとても厳しい口調で注意をしたりしていました。最初はひまりが怒られてはいないのに、泣きだしてしまう場面もありました。それでも振り返ると、とてもいい経験だったと思います。３年生の頃には、出席確認で名前を呼ばれるとしっかりと「はい！」とお返事ができるようになっていました。

また、１年生のスキー教室では社会福祉協議会でバイスキーを借りてスキー体験をすることが出来ました。リフトも乗ることが出来て、その事がすぐに学校にも連絡が入り、学校にいる先生方も喜んでくださるなど、学校全体で成功させよう！という雰囲気がとても伝わりました。

２年生の京都・奈良への修学旅行でも、スキー教室と同様に先生方で事前準備をきめ細かくして頂きました。そのお陰で、ひまりにとっては、一生忘れられない貴重な経験をすることが出来ました。

大切な写真

最後にひまりにとっても私にとっても大切な写真を紹介します。これは近所のお友達で小学校の時の登校班のメンバーとやった、たこ焼きパーティーの時の写真です。ひまりの同級生、１つ年下の子、その妹、ひまりの妹です。このメンバーで集まるきっかけは、ひまりと、ひまりの同級生の小学校卒業の時です。私が「卒業祝いにたこ焼きパーティやらない？」と声を掛けたら、みんな喜んで集まってくれました。その後、他のメンバーの卒業の時にもおこない、既に３回を数えます。来年の３月はひまりと同級生の高校卒業祝いで集まる予定です。その同級生の友達は、小・中学校の頃から、ひまりのことを気に掛けてくれていて、中学卒業後、高校生となり、部活が忙しく帰りも遅いのに、毎年ひまりの誕生日の頃にひまりの好きなお菓子を持って家にやって来ます。

彼女は「２０歳の成人式はひまちゃんをお迎えに来るから、一緒に行こう！」と言ってくれています。ひまりの心にどれほど響いているかわからないのですが、私にとっては涙が出るくらい嬉しい言葉でした。この写真もその友達が「みんなで写真撮ろうー」と声をかけ、部屋でゴロゴロしているひまりの周りにみんなが集まって、自然とこんな体勢になったものです。

おわりに

今回、このような事例発表のお話を頂いて、ひまりの保育園から中学校までを振り返ることができました。文章を考えながら写真を見返す作業になったのですが、記憶が薄れていた部分も蘇り、とても懐かしく振り返ることができました。そこで思ったのが、特に幼少期である保育園・小学校時代は地域で一緒に成長していくことは、とても大事なことだったのではないか！ということです。ここまでのお話はよい話ばかりで！と思われるかもしれませんが、それぞれの時代では、時には先生方と意見が合わずに、嫌な思いをすることもありました。でも、ひまりも高校を卒業するという今となっては「そんな事もあったねー」と忘れてしまう位の事で、ひまりに関わって下さったすべての方々に感謝の気持ちしかありません。

障害児を育てる親の悩みの一つにその兄妹関係があるとは思いますが、我が家でも気にはかけて

いました。２、３年前の話にはなりますが、長男と話をしていた時、私が「うちは普通の家庭とはちょっと違ったよね？」聞いたら、長男は「え？別に普通じゃん！」と答えました。私の中では特に小さい頃は、できるだけ兄妹一緒に、ひまりも一緒に！と育ててきました。そのお蔭で、兄や妹にしわ寄せがいっているかもしれないと思っていました。でも、長男の「普通の家庭と一緒だよ」という言葉には、ちょっと救われたような気がしました。

現在、高校３年生となったひまりは卒業後の通所先もほぼ決まり、また市内で生活できることにホッとしています。そして、その通所先には新宿小学校で一緒に過ごした先輩も通っていて、また一緒に活動できると思うと、とても楽しみです。この先も、ひまりがこの地域で、笑顔で楽しく生活できるように、そして将来的には親から独立した生活がおくれるようにと願っています。

ともに育つこどもたちのエピソード集part2

発行：令和２年

編集：東松山市地域自立支援協議会

東松山市こどもの育ちと学びを支える連絡会議

事務局：東松山市役所健康福祉部障害者福祉課